

「朝鮮通信使」からみた日韓文化交流

文 慶喆*

The Cultural Exchange between Japan and Korea
in "Chosen-Tsushinshi"

MOON Kyungchol

1. はじめに

日本と韓国の交流の歴史の中で、欠かせないのが「朝鮮通信使」である。この朝鮮通信使の歴史は日本と朝鮮半島の間にも古くからあり、その原型となるのが室町時代の朝鮮通信使だと言われている。朝鮮半島では高麗王朝の時代であり、高麗王朝からの要望によって実現された。この初期段階の朝鮮通信使は朝鮮王朝¹⁾の成立以降まで続いた。この当時、日本と朝鮮半島の間には「倭寇」という大きな問題があり、両方にとって悩みの種であった。この倭寇への対応を協議しに来たのが室町期の朝鮮通信使の始まりである。この時、書状官として来日した申叔舟²⁾の編纂した『海東諸国紀』³⁾が残されており、日本の国情を伺う内容も含まれている。

室町時代の朝鮮通信使は、1429年⁴⁾、1439年、1443年の正式な3回の他に、

* 東北文化学園大学総合政策学部教授 e-mail:kcmoon@pm.tbgu.ac.jp

1) 朝鮮王朝は1392年高麗王朝の武將であった李成桂の易姓革命によって建国された。中国の明の建国の24年後であった。

2) 1417～1475年。朝鮮初期の政治家、外交官。1443年朝鮮通信使の書状官として日本に赴いた。

3) 日本と琉球について書いた漢文の歴史書。第9代成宗の命によって1471年刊行された。

4) 朴瑞生を正使、李芸を副使として京都の送った第1回目の正式の朝鮮通信使。

1420年の特別な例や事情によって途中帰った1422年、1432年の朝鮮4代王の世宗の時の例も知られている。また、途中海難に会った1459年の例⁵⁾、日本国内事情によって途中中止となった1479年の例⁶⁾の他に、計画の段階で中止になった1413年、1475年の例もあった。

しかし、一般的に言う「朝鮮通信使」は、徳川幕府時代の200年間に渡る交流を指すことが多い。朝鮮通信使による日韓交流は、中国との冊封体制とは異なり、交隣関係という特殊な関係が維持された。交隣というのは両国の関係が対等で、平等的な関係を意味する。朝鮮の通信使派遣の公的な目的は「国書」交換という国家対国家という外交行事であったが、その裏には他には例の見られない大規模な民間交流が主流の画期的なイベントに発展して行った。

勿論、江戸時代の朝鮮通信使の始まりは、「文禄・慶長の乱」という不幸な過去があった。その後、国交回復の機運は意外と早く訪れた。朝鮮を巡る東アジアの国際情勢は緊迫に変わっていた。今まで朝鮮を守る立場にあった明は国力が衰え、その北には異民族の強力な勢力が構えていた。このような情勢の中で、日本と朝鮮の国交回復の先頭に立ったのが対馬藩だった。実は、対馬藩はこの文禄・慶長の役で大きな被害を受けた。2000人に上る兵士だけでなく、朝鮮出兵の前進基地として大きな代価を払った⁷⁾。その代わりに朝鮮の「巨濟島」⁸⁾を与える約束は、戦争が終わり果たせなかった。このような状況の中で、対馬を再建するためには朝鮮との貿易を再開するしか道はなかった。早速1998年から対馬藩の宗氏は使者を釜山に送った。これは対馬藩単独の行動であったと見られる。その後も使者を送り続けたが、1599年3月に送った「梯七太夫」は交渉どころか明に渡された。しかし、対馬藩はこれに屈せず誠意を尽くした。これに対して朝鮮は無反応で一貫したが、1600年に入り、状況は一変した。今まで日本との交渉を対馬藩に依存した朝鮮側としては、対馬藩により積極的な対応が必要になった。方針を変えた朝鮮は、関ヶ原以降の日本の情勢を把握するため1602年金継信と孫文或を対馬に派

5) 途中海難で日本には到着していない。

6) 対馬まで到着している。

7) 対馬藩家文書『洲河家文書』

8) 朝鮮半島南部にある島。面積は約400km²。

遣した。真意を知った朝鮮は、その後「松雲大師」⁹⁾を日本に送った。1604年8月、「開諭書」¹⁰⁾を持って対馬に渡り、徳川家康を謁見するため京都を訪れる。松雲大師と徳川家康との面談は1605年3月4日、伏見城で行われた。徳川家康は、この場で自分は関東にいて朝鮮との戦争にはかかわっていないことを宣言する¹¹⁾。松雲大師は捕虜送還と朝鮮に誠意を尽くすことを要求し、5月に帰国する。これを切っ掛けに本格的な国交交渉が始まった。朝鮮側は日本にその前提条件として三つの要求をした。

- ① 日本側が先に朝鮮側に国交回復を要請する国書を送ること。
- ② 日本に連れて行った捕虜を返すこと。
- ③ 朝鮮王陵を盗掘した犯人の逮捕。¹²⁾

これはあくまでも朝鮮側の大義名分だったので、日本は上手く取り入れた。これには朝鮮側と徳川幕府の利権が一致したからである。国交回復の協定¹³⁾は1606年正式に結ばれた。朝鮮通信使の第一回目は、呂祐吉を正使として、467名が1607年に派遣された。この受け入れは鎖国政策の徳川幕府にとって異例のことであった。しかし、外国文化に接する機会がなかった一般の人にとっては絶好の文化的なオアシスであったに違いない。馬に乗っている小童に一筆を強請る場面¹⁴⁾は名場面中の名場面であり、どんなに期待していたかが良く分かる。

一番近い国同士として、交隣の目標を掲げた朝鮮通信使による交流は、その後200年間に渡り続いた。その過程で、両国の文化交流は活発になり、人と人の交流も活発に行われた。全12回の名称、人数、正式な目的は次の【表1】のようになる。

9) 1544～1610。朝鮮時代の僧侶。文禄・慶長の役の時、加藤清正と交渉にも出た。

10) 対馬藩に朝鮮との貿易を許可する文書。

11) 『巧事撮要』巻上

12) 1606年6月、松雲大師の帰国後總めて対馬藩に伝えた。

13) 「己酉約条」。全13.条の送使条約。

14) 「英一蝶」が画いた「馬上揮豪図」

【表1】 朝鮮通信使の各回の名称, 人数, 目的

回	年度	名称	人数	目的
1回	1607年	回答兼刷還使	467名	国交回復兼刷還
2回	1617年	回答兼刷還使	428名	大阪評定回答兼刷還
3回	1624年	回答兼刷還使	300名	徳川家光の襲職祝い
4回	1636年	通信使	475名	泰平の祝い
5回	1643年	通信使	462名	徳川家綱の誕生祝い
6回	1655年	通信使	488名	徳川家綱の襲職祝い
7回	1682年	通信使	475名	徳川綱吉の襲職祝い
8回	1711年	通信使	500名	徳川家宣の襲職祝い
9回	1719年	通信使	479名	徳川吉宗の襲職祝い
10回	1748年	通信使	475名	徳川家重の襲職祝い
11回	1764年	通信使	472名	徳川家治の襲職祝い
12回	1811年	通信使	336名	徳川家斉の襲職祝い

このように、第1回から第3回までの名称は「回答兼刷還使」で、特に刷還使¹⁵⁾の意味は捕虜を返すという強い意志が反映されている。また、今は「朝鮮通信使」という名称が一般的になっているが、資料のどこにも見当たらず、「信使」や「通信使」が正式な名称であった。歴史的な第1回目の朝鮮通信使の旅程を辿ると【表2】のようになる。

【表2】 第1回目の朝鮮通信使の旅程

出発地	出発日	備考
漢陽 ¹⁶⁾ 出発	1月12日	王宮前
釜山 出発	2月29日	釜山では物産の購入や人員補充の為長く滞在
対馬 出発	3月21日	対馬では打ち合わせや準備の为一ヶ月程滞在
大阪 到着	4月8日	大阪までは海路で、ここから陸路に変わる
京都 到着	4月12日	大阪で長く滞在したため
江戸 到着	5月24日	正宿舎は浅草東本願寺

朝鮮通信使の構成は、次の三使が中心となる。

15) 1606年9月、朝廷の決議によって、朝鮮国王「宣祖」が命名した。1606年9月7日、『宣祖実録』

16) 今のソウル

【表3】 朝鮮通信使の三使

正使 ¹⁷⁾	1人	副使	1人	従事官 ¹⁸⁾	1人
-------------------	----	----	----	--------------------	----

この三使以下は次のような構成であった。

【表4】 第12回目1811年(文化8年)の朝鮮通信使の一行の座目

上上官	3人	上判事	3人	次上判事	2人
押物判事	2人	製述官	1人	正・副書記	2人
医員	2人	写字官	1人	画員	1人
軍官	10人	伴人	2人	陪行	1人
理馬	1人	喂鷹	1人	騎船将	2人
卜船将	2人	盤纏直	2人	禮単直	1人
郷書記	2人	都訓導	2人	小童	15人
小通事	9人	両使奴	4人	一行奴	30人
吸唱	4人	刀尺	5人	吹手	12人
羅将	14人	砲手	4人	鉞手	22人
形名手	2人	沙工	16人	兼定軍	40人
格軍	119人	風楽手	12人	その他	
































以上の役員の等級を、「上上官」、「上官」、「次官」、「中官」、「下官」に分け、待遇した。一番下の下官には「格軍」、「風楽手」などであった。主な構成役員は、通訳を担当する「訳官」、画家の「画員」、医者等の「医員」等の専門職の人が入り、学者等と共に日韓文化交流が行われた。また、朝鮮通信使が通る経路を中心に交流が行われたが、これに合わせて遠くから来る人もいた。朝鮮の釜山¹⁹⁾から大阪までは海路で、大阪の淀浦からは陸路に変わった。次は朝鮮通信使の主な経路である。

◀釜山浦(永嘉台)▶ ➡ ◀対馬(佐須奈, 鰐浦)▶ ➡ ◀巖原▶ (下船宴, 約10日間)

17) 正使は「礼曹参議」級であったとされる。

18) 江戸以前の朝鮮通信使では「書状官」であった。

19) 釜山出港の前に「延神祭」、「海神祭」が行われた。

 < 壱岐 >  < 唐津 >  < 藍島 > (相ノ島)  < 赤間関 > (下関)
 < 室住 >  < 上関 >  < 鎌刈 > (蒲刈)  < 輪浦 > (輻浦)
 < 下津 >  < 牛窓 >  < 室津 >  < 明石 >  < 兵庫 >
 < 大阪²⁰⁾ >  < 淀浦 >  < 京都²¹⁾ >  < 大津 >  < 草津 >
 < 守山 >  < 佐和 (彦根)²²⁾ >  < 大垣 >  < 名古屋 >
 < 岡崎 >  < 新井 >  < 浜松 >  < 富士下 >  < 駿府 >
 < 小田原 >  < 品川 >  < 江戸 >  ☆ < 日光²³⁾ >

この往復の道は何カ月もかかり、あるところでは一ヶ月以上滞在することもあった。朝鮮通信使の役員はこの過程で多くのことを体験し²⁴⁾、多くの人に出会い交流を深めたと考えられる。日本の高級官吏から地方の官吏、または通過する地域の学者、僧侶、画家、医者、農民までの幅広い層が直接的、間接的に交流に参加した。

2. 朝鮮通信使による日韓交流

2-1. 「林羅山²⁵⁾」と「朴安基²⁶⁾」

朝鮮通信使の最初の名目は、「回答兼刷還使」であった。しかし、第一回目と第二回目が終わった後、本格的な文化交流期に入る。勿論、最初からも詩

20) 大阪内港に船を停泊し、日本の大名が提供する御座船に乗り換える。

21) 第二回目の朝鮮通信使は京都が終着地

22) この道を朝鮮通信使が通ったから「朝鮮人街道」と呼ばれる。

23) 1636年第四回、1643年第五回、1655年第六回の三回は日光まで行く。

24) この体験は、後に日記形式の見聞録の形として残されている。『海槎録』、『扶桑録』、『東槎録』、『日本日記』等がある。

25) 1583 - 1657. 江戸時代初期の朱子学派儒学者。「道春」の名で知られている。

26) 1608 - 未詳。朝鮮中期の天文学者。静岡県清水市にある清見寺にも朝鮮通信使の交流の証拠としてその書が残されている。

文唱和による交流はあった。しかし、この朝鮮通信使の目的からして友好的な交流の雰囲気ではなかったと思われる。

日本側の記録『通航一覧』によると、林羅山は1624年第三回目の朝鮮通信使の写字官として参加した「李誠国」の間に最初の詩文唱和が行われた。これがきっかけにはなったが、本格的に行われるのは1643年第五回目からである。

朝鮮側の日記によると、1643年7月10日、林羅山は朝鮮通信使の宿舎である江戸の東本願寺を訪ね、詩文唱和を申請する。その相手になったのが、第五回目朝鮮通信使の読祝官として参加した「朴安基」である。この時、林羅山は二人の息子も連れて来て、詩文唱和に参加させた。

この時、二人の息子も同行したことで、次の1655年第六回以降の朝鮮通信使との交流の繋がりとなる。1655年9月10日に「林春斎」とその長男「林春信」が訪ねる。この時は拡大して、複数の本の学者が同行したと記されている。

その後の日記にも1764年(第十一回目)2月22日、大学頭「林信言」とその息子「大学秘書監」の「林信愛」が訪ねて来て朝鮮通信使の「製述官」や「書記」らと詩文唱和を交わし交流をしたことが記されている。

この「林羅山」と「朴安基」との交流は、その後にも影響を与え、代々大学頭を務めた林家をはじめ、他の学者も巻き込み日韓文化交流の慣例になり、大きく貢献したと思われる。

2-2. 「水足安直²⁷⁾」と「申維漢」

申維漢は、1719年第九回目の朝鮮通信使の「製述官」の役員として参加した。この時の記録が『海遊録』²⁸⁾である。申維漢は、1719年4月11日、漢陽を出発、5月13日に釜山に到着する。途中の宴会も多く、一ヶ月以上もかかった。釜山でまた一ヶ月以上を有し、6月20日対馬に向かい、その日の内に佐須浦に到着。6月23日に佐須浦から鰐浦、豊浦、西泊浦、金浦を経て、6月27日に巖原に到着。ここからは津島藩主の案内で7月19日出発、壱岐島、藍島、地島を通過して8月18日に下関の赤間関に到着。船は瀬戸内海に入り、上関、鎌刈、輦浦、牛窓、室津、明石を経て9月3日に兵庫に到着。9月4日に大阪に到着

27) 1671 - 1732 江戸時代中期の儒学者。

28) 1719年一行記録の『海遊録』

して5日間滞在することになる。ここで申維漢は水足安直と出会うことになる。『海遊録』によると、大阪の五日間は夜遅くまで書生十数名と過ごした。大阪での宿舎は西本願寺だった。

それぞれ姓名、字、号を紹介し、詩文唱和を交わした。その中にはある童子がいて、姓は「水足」、名は「安方」という。容貌はまるで絵のようで²⁹⁾、詩も優れている。申維漢は頭を撫でながら「神童」、「神童」と言ってあげた。それに感謝し、滞在している間彼らは毎日訪ねて来た。

この水足安方は遠く熊本から朝鮮通信使と交流をするため父の安直と共に千里の道を来たのである。このとき水足安方は十四歳だった。申維漢を訪ねて来た十数人の中でも水足親子は特に印象に残ったようである。また、水足安直もこの時の交流の内容を『航海献酬録』に残している。この交流は特に9月8日に詩文唱和を通して、学問や政治、書籍について意見を交わす。まず、安直は自己紹介で、名は安直、字は仲敬、号は屏山と紹介する。次に書を書き、朝鮮学士青泉申公館下に詩の添削を求める。これに贈答詩で申維漢は答える。これを通して、申維漢は日本の文人達の学問に対する関心と熱意を感じた。また、水足安直は「李退溪」³⁰⁾『陶山記』読んだ感想を明かし、その子孫について質問する。陶山書堂についての質問に、春秋に祀っていると答える。当時大阪は書籍の出版が活発で、中国や朝鮮の書籍も販売され、多くの人に読まれていたことに申維漢は驚く。『海遊録』には、大阪には多くの書屋があり、古今の書籍を揃えている。中国・朝鮮の選集もないものがないほどであると記している。このような書籍の普及によって日本の知識人の間に李退溪に対する関心が高まり、水足安直の質問にも表れている。

水足安直は申維漢に九つの質問をするが、その大半は朱子学に関するものであった。この交流は日本の知識人に与えた影響はとて強く、日韓の学問的、文化的交流のモデルになったと考えられる。

29) 本文は「面目如画」

30) 1501年～1570年。李滉。朝鮮中期の文臣、学者。

2-3. 「北尾春圃³¹⁾」と「奇斗文³²⁾」

「北尾春圃」は美濃大垣出身で代々医師の家系である。大垣は第一章で述べたように、朝鮮通信使が通る道にある。朝鮮通信使は、大阪までは海路で、大阪から江戸までは陸路であるが、京都から名古屋に行く途中に大垣があり、この道を朝鮮通信使に因んで朝鮮人街道と呼ばれていた。特に、大垣は朝鮮通信使の宿場町でもある。往路も、復路も朝鮮通信使は大垣に泊まっていた。春圃はこの機会が医学を議論する大きなチャンスと考えた。日本では既に『東医宝鑑』など朝鮮の医学に関心が高まり、朝鮮通信使の中に「良医」をいれることを要求していた。

1711年、第八回目の朝鮮通信使の一行で、北尾春圃の相手になったのが良医「奇斗文」である。奇斗文は従七品の良医であった。奇斗文と北尾春圃が会ったのは、1711年12月1日夜から三日間で会った。12月1日は、江戸から朝鮮の漢陽に帰る復路であった。第八回目の通信使は1711年5月15日漢陽を出発し、江戸に着いたのが同年10月19日であり、江戸には一か月位滞在し、その帰りに大垣に寄ったのである。

二人が会ったのは、通信使の宿舎である大垣桃源山「全昌寺」である。春圃はこの席に「春竹」、「春倫」、「道仙」の三人の息子を連れて来た。ここで三日間に渡って問答が行われ、この問答は『桑韓医談』というタイトルで1713年出版された。

春圃は最初に朝鮮人参についての質問から始まった。当時日本では、朝鮮人参に対する人気が高まり、名薬と言われていた。しかし、その生産量は限られていて、値段も高く、江戸では一貫三百両で売られていたという説もある。春圃はその代用品として「沙参」の効能について聞く。奇斗文はこの沙参に他の漢方の材料を加えてもその効能は期待できないと答えた。この交流を通じて、奇斗文は北尾春圃を「東海に天民あり」と高く評価した。

春圃は自分の経験から「腰痛」について質問し、奇斗文は「三合湯」の薬と「灸」の処方である。また、春圃は三十代男性の難病である「耳鳴」について聞いている。

31) 1658～1741。江戸時代の医者で、脈診の達人と言われていた。

32) 朝鮮医官。従八品。

この結果が『桑韓医談』であり、これは日本の医学界に刺激を与え、医事問答を盛り上げるきっかけにもなった。以来、各地でこのような医事問答が行われた。

1719年、第九回目の通信使の時には、海の天気の影響で船の出発が遅れ、長い時間「小野士厚」と良医「権道」の間で医学問答が行われることが出来た。この医事問答を纏めて出版した『藍島鼓吹』等も有名である。

このような問答は、朝鮮通信使が通る各地で行われ、江戸の西本願寺や京都、名古屋、藍島などに渡り、その結果は当時発展著しかった出版業と相まって人気を博し、全国的に知識の共有が行われた。このようなことから歴史上前例のない200年間に渡る友好親善交流が続くのである。

1764年、第十一回の通信使で、医事問答の最後になる交流が、2月3日、「山口忠居」と良医「李佐国」が名古屋で行われ、後に『和韓医話』として纏められた。

このような、日韓医学交流を纏めると次の【表5】のようになる。

回	年 度	日本側	朝鮮側	その他
第4回	1636年	野間三竹	白士立	医員間の交流
第6回	1655年	貝原益軒	韓亨国	医員と文士間の交流
第7回	1682年	今井小四郎 柳川震澤	鄭斗俊	医員と文士間の交流
第8回	1711年	竹田定直	奇斗文	医員間の交流
第9回	1719年	加藤謙齋 築山克	白興詮	医員間の交流
		北尾春倫	権道	医員間の交流
第10回	1748年	百田安宅 橘元勲	趙崇寿	医員間の交流
		佐藤養浩	趙徳祚	医員間の交流
第11回	1763年	山口忠居 山田正珍 奥田元継	李左国	医員間の交流
		北山彰	南斗旻	医員間の交流

朝鮮通信使による日韓文化交流は多分野に渡り行われたが、特に医学問答は当時の出版事情と相まって『桑韓医談』等の多くの医学書が刊行された。これによって医療の治療法は発展し、近代医学に大きく貢献したと考えられ

る。また、この交流は必ず医員同士だけでなく、場合によっては医員と文士等の交流もあり、「朝鮮人参」や「鍼灸」などの医事の他にも「ハングル」、「植物」、「禽獣」、「詩文唱和」など多様な分野での意見が交わされていた。

2-4. 「新井白石³³⁾」と「趙泰億³⁴⁾」

「新井白石」と「趙泰億」は、『江関筆談』としてあまりも有名である。二人は、1711年朝鮮通信の本陣の宿舎であった「浅草本願寺」において行われた。

【表5】 「新井白石」と「趙泰億」の問答日程

回数	日程	場所
一回目	11月5日	浅草本願寺
二回目	11月6日	浅草本願寺

この内容は、両国で別々刊行された。この『江関筆談』によると、次のような内容の話しをしている。

- ① 趙泰億が新井白石に筆談を提案し、それに呼応する
- ② 新井白石が通信使三使に喫煙の有無と勧誘
- ③ 通信使三使が新井白石に旧伝来の書籍の日本に現存するかの可否を問う
- ④ 南崗が新井白石に過去の竹簡を見せてもらえないかを問い、不可と答えられる
- ⑤ 新井白石が三使に大西洋、イタリア、オランダ、琉球、唐山や朝鮮の人との出会いについて
- ⑥ 新井白石が三使に万国全図の有無について
- ⑦ 青坪が新井白石に日本(江戸?)から琉球、中国の福建省、また江戸から長崎までの距離を問う
- ⑧ 青坪が新井白石に海賊の有無を問う
- ⑨ 南崗が新井白石に毎年日本に往来する商船の数を問う

33) 1657年～1725年。江戸時代中期の旗本・政治家・朱子学者。

34) 1675年～1728年。朝鮮王朝の官僚。

- ⑩ 趙泰億が新井白石に最近唐山地方の船舶が日本に来ない理由を問う
- ⑪ 南崗が新井白石に海賊について問う
- ⑫ 趙泰億が新井白石に古里国利馬黠が残した文字について問う
- ⑬ 南崗が新井白石に日本に来た琉球国の使臣の衣服制度について問う
- ⑭ 南崗が新井白石に日本に来た琉球国使臣の使用する文字について問う
- ⑮ 新井白石が三使に朝鮮は清国の礼儀作法を使わず未だに明の礼儀作法に従う理由を問う
- ⑯ 趙泰億が新井白石に朝鮮の剣術を観覧することを勧誘し、新井白石は丁寧拒む
- ⑰ 新井白石が三使に申叔舟³⁵⁾の対馬の件を取り上げ、日朝友好親善を強調
- ⑱ 趙泰億が新井白石に「国諱³⁶⁾」に関する規定について問う
- ⑲ 趙泰億が新井白石に日本からの回答国書を予め拝見できないかを問う
- ⑳ 新井白石が三使に朝鮮の官の制度について問う
- ㉑ 南崗が新井白石に朝鮮の官服制度に対する日本の將軍の評価を問う
- ㉒ 南崗が新井白石に日本の冠婚葬祭において朱子家礼の使用可否を問う
- ㉓ 新井白石が三使に煙草を誘う
- ㉔ 趙泰億が新井白石に酒の勧誘と名前の号を使った言葉遊びをする
- ㉕ 新井白石が三使に朝鮮の煙草と日本の煙草の品質について論ずる
(夕食が入る)
- ㉖ 新井白石と趙泰億などの発言(天寿堂と勿庵の紀文要請)
- ㉗ 新井白石が三使に夕食をしながら前考を使い戯れる
- ㉘ 趙泰億が新井白石に帰国日程を早めてくれるよう頼む
(ここで製述官と三書記が入る)
- ㉙ 新井白石と四文士との挨拶
- ㉚ 新井白石が三使、製述官に酒を勧めながら戯れる
- ㉛ 南崗が新井白石に書記「洪舜衍³⁷⁾」の紹介と「洪世泰」と洪舜衍との関係について説明する

35) 1417~1475. 朝鮮前期の名臣で、優れた国際的感覚と実務能力を備えた人物とされている。

36) 中国や朝鮮では王や親の名は尊敬を込めて呼ばないこと。

37) 1653年~未詳。朝鮮中期の文臣。

- ③② 新井白石が三使に「成琬³⁸⁾」の生存について問う
- ③③ 新井白石が三使に成琬の子供の有無を問う
- ③④ 東郭が新井白石に詩を要請し、新井白石が「客将帰曲」を唄う
(蕎麦と酒が出る)
- ③⑤ 東郭が新井白石に蕎麦と酒を使い戯れる
(軟らかな豆腐と葡萄が出る)
- ③⑥ 新井白石が南崗に自国の料理に対する自慢とこれに関する牽制
- ③⑦ 趙泰億が新井白石に交わりの情を述べる
- ③⑧ 新井白石が三使に「鄭夢周³⁹⁾」の子孫⁴⁰⁾に出会った喜びを述べる
(ここで雨森芳洲⁴¹⁾が入る)
- ③⑨ 趙泰億が新井白石に雨森芳洲を褒める
- ④⑩ 趙泰億が新井白石に「三宅絹阿明」について問う
- ④⑪ 青坪が新井白石に今日の出会いの喜びを述べる
- ④⑫ 新井白石が三使にこの筆談を後日送ってくれるよう頼

この内容については、任守幹本か趙泰億本によって若干違うところもあるが、以上のような内容で進められた。全体を42に分けた場合、新井白石の発言が17回で、朝鮮通信使側の発言が25回になる。朝鮮通信使側は趙泰億を含め三使と製述官まで複数であるが、日本側は専ら新井白石一人である。質問は朝鮮通信使側が多く、新井白石は質問よりも友好親善の重要性や接待の為の遊戯性発言が多い。特に趙泰億は朝鮮通信使の正使として外交的な要求や意見が多いが、それに対して新井白石は明確な意見を避ける傾向がある。但し、万国全図を使い、自分の博識を披露し、優越性を見せつける場面もある。朝鮮通信使における当時の交流の様子を伺う上、とても貴重な資料とも言えよう。

38) 1639年～未詳。朝鮮通信使の製述官として日本に来たことがある。

39) 1337～1392。高麗末の文臣、学者。

40) 鄭夢周の子孫は製述官の]鄭續述]で、鄭夢周の十一代孫。

41) 1668～1755。江戸中期の儒学者。朝鮮語にも通達し対馬藩で通交実務も担当した。

2-5. 「池大雅⁴²⁾」と「金有聲⁴³⁾」

朝鮮通信使による交流において、詩文唱和以上に活発だったのが「書画」であった。これには日本人の書画に対する嗜好が働き、強い要望があった⁴⁴⁾。この要望に合わせて朝鮮通信使一行の中には卓越した「写字官」と「画員」が含まれていた。写字官の派遣は古く、1590年から見られる。以降も規定人数より多く、3名から4名の写字官が派遣されるようになった。また、これに加えて当代最高の「別書写」を帯同することもあった。画員は「図画署」の推薦を受けて選抜したが、渡日経験者や画家の家、訳官の家の出身者が優先的に選ばれた。これによって日韓間において長い間持続的な交流が可能であった。この画員達の人気は高く、多くの人から書画を求められた⁴⁵⁾。

また、朝鮮通信使の訪日に合わせて、鹿野家や住吉家に「朝鮮御用御屏風」を作らせ、朝鮮の国王に献上した。勿論、朝鮮通信使の行列を模した木版画を作り、朝鮮通信使の人気に乗り、収益事業にも乗り出した。

朝鮮通信使側は専門の写字官や画員以外の文人の中には詩書画に優れた人も沢山いて多様で活発な交流が行われる原動力となった。この中でも、1711年第8回通信使の時の「祇園南海」と「趙泰億」、1748年第10回通信使の時の「大岡春卜」、「江阿弥」と「李聖麟」、1763年第11回通信使の時の「池大雅」と「金有聲」等が代表的である。

金有聲は南宋画の大家で、1763年訪日時に清見寺の住職の依頼で「金剛山圖」と「洛山寺圖」⁴⁶⁾を画いた。金有聲と南画の大家である池大雅との交流は、二人の画風からすると当然の流れである。これによって「真景山水畫」の画風は日本に影響を与え、日本の美術の発展に大きく貢献した。金有聲と池大雅は1763年第11回の通信使の時に会い、交流を深めた。しかし、池大雅は自分の作品について金有聲から高く評価されていないと感じ、後に手紙を書いてその感情を伝えるとともに、富士山を画く時の技法について諮問を求めることになる。

42) 1723～1776。江戸中期の文人画家、書家。

43) 1725～未詳。朝鮮通信使随行画家。

44) 「能書画之人帶來」

45) 「書画求請」

46) 金有聲の作品は日本に10点ほど、韓国に8点ほど残されている。

このような交流によって朝鮮側も日本の画風について再認識する機会となり、日本では「葛飾北斎」等が朝鮮通信使をモチーフにした多くの作品を制作することになる。

3. 終わりに

朝鮮通信使の役割は、最初は日本と朝鮮との間の政治的、外交的な問題を解決する為に始まったが、回を重ねる内に文化交流が主な役割に発展した。このような変化はある意味では自然発生的な面もあるが、当時の社会による文化的な要求が高まったのもその一因であると考えられる。また、社会が安定し、ある意味では両国の関係が一番友好的な時期でもあった。

朝鮮通信使の構成員はその時代においては生死の危険もある中で日本に渡ることになる。この日程は長く、遠い道程であった。日本での滞在も数カ月にわたり、対馬から江戸までの険しい道も歩いた。その時代の人にとっては、地理的な距離よりも歴史のあるいは心理的な距離がもっと長かったと思われる。

朝鮮通信使は見知らぬ他国で沢山のことを見て、沢山のことを体験した。勿論沢山の人にも出会ったことにもなる。これを帰国して、日記形態などの形で纏めた本を出した。『海行總載』などの多くの見聞録を通してその交流の中身を窺い知ることが出来る。

朝鮮通信使一行は、日本で様々な人と交流することになる。その交流の対象は、日本の官吏から学者、医者などの専門家だけでなく、一般庶民までもが。

この交流は定期的で長きにわたり行われたため、各分野では事前に準備した人もいた。朝鮮通信使が通る各地では、その日程に合わせて待ち構えていた。勿論数千里遥々遠い所から来た人もいた。2-2. で述べた「水足家」の例もその一つである。

この交流は、事前に企画された例もあるし、自然発生的な場合もあった。企画された例の一つに「馬上才」がある。朝鮮武芸24術の一つである馬上才

は朝鮮通信使交流に特別に招待され1635年4月20日、八代須河岸で初公演されて以来、人気を集めた。この公演の為に射場と馬場が特別に用意された。1711年第8回の時には、田安門内代官町に新馬場が設置され、それを「朝鮮馬場」と呼んだ。このような公演を見た日本人の文化的衝撃は、荻生徂徠の漢詩「麗奴之戯馬の歌」や「韓人戯馬圖」等の絵の素材として表れている。生活の分野においては、「衣服」、「飲食」、「民俗」等があった。日本に滞在する期間が長く、飲食は日々大事な問題であった。食事については、日本側が提供する「塾供」と日本側は材料だけ提供し、朝鮮通信使帯同の調理師が作る「下程」があった。この過程で両国の食文化の交流があったと考えられる。服飾についても両国は大きな違いがあり、お互いに興味があった。朝鮮の官服制度にも興味があったのか1748年第10回通信使の時には日本の官服制度を直すために朝鮮の官服を借りたこともあった。朝鮮通信使の服飾をした人形が各地で作られ、人気を博した。

民俗においても、朝鮮通信使は日本に長く滞在することになり、季節の過ごしや正月、お盆等の日本の祝日も体験した。朝鮮通信使は日本の端午の節句やお盆について高い関心があり、冠婚葬祭についても意見が交わされた。芸術の分野においても、書画以外に音楽や舞踊等があった。朝鮮通信使の一行には楽団と踊り手が含まれ、日本各地で公演が行われた。また、朝鮮通信使は日本の雅楽演奏に衝撃を受けた。技術分野では造船や医学交流も盛んに行われた。

勿論、朝鮮通信使の中心は知識人であり、文学や学問の交流が重視されたのは言うまでもない。朝鮮通信使を通して、日韓は学問から、医学、技術、芸術、あるいは日常文化まで多方面にわたり活発な交流が行われ、両国の発展に繋がった。このような交流を通して、それぞれ自国の文化を再認識する切っ掛けとなった。また、両国においては新しい人材が育てられた。

朝鮮通信使を介した交流を通じて、相手国に対する認識の変化を齎し、お互いを信頼し、友好関係が一層深まった。平和と文化の発展に大きく貢献し、未来志向の日韓関係構築に良い模範であることは言うまでもない。

参考文献

- 『江戸時代の朝鮮通信使』 李 進熙 1992 講談社
- 『海槎日記 江戸時代第十一次(宝暦・明和)朝鮮通信使の記録 日記篇』趙暉(若松実訳) 1995 日朝協会愛知県連合会
- 『海遊録』申 維翰(姜在彦訳) 1974 平凡社
- 『近世日朝関係史の研究』三宅英利 1986 文献出版
- 『近世日本人は朝鮮をどうみていたか』倉知 克直 2001 角川書店
- 『近世日本と朝鮮漂流民』池内 敏 1999 臨川書店
- 『国史大辞典』11 国史大辞典編集委員会編 1990 吉川弘文館
- 『国史大辞典』13 国史大辞典編集委員会編 1992 吉川弘文館
- 『古代朝鮮』2004 講談社〈講談社学術文庫〉
- 『大系 朝鮮通信使: 善隣と友好の記録』1~8、辛基秀・仲尾宏 1993~1996 明石書店
- 『朝鮮通信使への接待と情報収集 - 伊予国津和地島を中心として -』『地方史研究』341号 玉井建也 2009 地方史研究協議会
- 『朝鮮通信使と日本人』李 元植他 1992 学生社
- 『朝鮮通信使-人の往来、文化の交流』辛 基秀 1993 明石書店
- 『朝鮮通信使に奇跡-増補・前近代の日本と朝鮮』中尾 宏 1993 明石書店
- 『朝鮮通信使-江戸日本の誠心外交』中尾 宏 2007 岩波新書
- 『朝鮮の歴史 先史から現代』田中俊明編 2008 昭和堂
- 『東槎上日録 江戸時代第二次(元和三)朝鮮通信使の記録』呉允謙(若松実訳) 1986 日朝協会愛知県連合会
- 『東槎日記 江戸時代第八次(正徳元年)朝鮮通信使の記録』任守幹(若松実訳) 1993 日朝協会愛知県連合会
- 『東槎録 江戸時代第三次(寛永元)朝鮮通信使の記録』姜弘重(若松実訳) 1988 日朝協会愛知県連合会
- 『日朝関係史の研究』上、中、下 中村栄孝 1965 吉川弘文館
- 『日東壮遊歌』金 仁謙(高島淑郎訳) 1999 平凡社
- 『漂流記録と漂流体験』倉知 克直 2005 思文閣出版
- 『扶桑録 江戸時代第二次(元和三)朝鮮通信使の記録』李景稷(若松実訳) 1988 日朝協会愛知県連合会
- 『海槎録 江戸時代第一次朝鮮通信使の記録』慶七松(若松実訳) 1985 日朝協会愛知県連合会
- 『李朝の通信使-江戸時代の日本と朝鮮』李 進熙 1986 講談社
- 『わが町に来た朝鮮通信使 I』辛 基秀 1999 明石書店